

山の恵みからの産業復興

いわてを見る

寺井 良夫 (建設部門)

東日本大震災からもうすぐ10年。インフラ整備、住宅再建、産業再生がようやく形になって見えてきてはいる。しかし、この間にたびたび台風災害に見舞われたり、今年になってからは新型コロナの影響もあって、復興への道のりはまだ厳しい。とくに地域の産業は苦境に立たされていると言わざるを得ない。

三陸の復興を成し遂げるには、震災前の産業を取り戻すことに加え、新たな産業を創り出していくことが重要だ。そのためには、地元にある資源や人材を掘り起こしていく地道な取り組みを進めていくことが大切である。

三陸といえば海の資源に目が向きがちだが、山の資源も忘れてはならない。三陸は海岸線のすぐそばまで急峻な山が迫っている。山の奥地で得られるような山の恵みが海の恵みと一緒に得られることが三陸の大きな特徴といえる。

山の恵みの一つに和ぐるみがある。岩手は全国の中でも一番と言って良いほどくるみの木が多く自生している。河川敷や川沿いの堤防、山間部の沢近くなどには群落が随所で見られる。秋に実を落とした和ぐるみは川の流れて運ばれて河口や海岸線に大量に流れつく。三陸沿岸の各地では北上山地で育った和ぐるみが簡単に手に入れられることもあって、和ぐるみ食の独特の文化がある。お正月のお雑煮の餅をくるみだれで食べるのはその代表である。ひゅーず、かま餅という名称で呼ばれるおやつにも和ぐるみは欠かせない。大槌町の金澤地区では、シソの葉で巻いた寿司の中に和ぐるみが入っていて、そのおいしさに感動した。

くるみと言えば樹皮も活用できる。その樹皮の特

性は、剥ぎやすい、丈夫でしなやか、まっすぐで長さがある、木肌が美しいことから、かご細工の材料には打ってつけである。くるみの樹皮で編んだかごは近年非常に人気が高まっている。かご細工教室を開けば、申し込みが即日で定員に達するほどである。

久慈市の清水商店では、シラカバ樹液にこだわった新商品を次々に出している。平庭高原をはじめシラカバがたくさん自生している土地柄である。早春にシラカバの樹液を採取し、シラカバドリンクにしている。ほんのり甘さがありシラカバの養分をいただいて清々しい気持ちになる。シラカバ樹液を使ったジェル、せっけんもあり、じわじわと人気が広がっている。今年の新商品はヨモギ茶である。そこらじゅうにいくらでも生えていて、どちらかといえば邪魔者扱いされるヨモギ。それを春のうちに一つ一つ摘み取って乾燥させるのは手間がかかる仕事である。そうしてできたヨモギ茶をいただいた。ヨモギ独特のいい香りがしてとてもおいしい。

株式会社のだむらがこだわっているのはヤマブドウ。もともと樹木に絡みついて山林に自生しているヤマブドウを活用しようと野田村ではヤマブドウ栽培に力を入れてきた。ヤマブドウの加工品としてはワインをはじめとして、最近ではピューレ、ジュース、サイダーと商品のラインナップが充実してきている。ヤマブドウの強烈な味はとて深みがあって忘れられないものになる。

このほかにも山の恵みといえば、きのこや山菜も豊富にあるほか、大槌町ではジビエの取り組みも始まっている。三陸にはまだまだ山の宝物がたくさん眠っている。もっと掘り起こして活用策に知恵を絞りたい。